

運転免許を返納した高齢者のライフストーリー研究

1150425 重本 愛美

高知工科大学マネジメント学部

1. 概要

運転免許を返納した高齢者のこれまでの人生での車との付き合い方や車以外のその人の生活や過去から現在に至るまでの記憶を対象とした既存研究は存在しない。本研究では、事前インタビューから得た「車は人生」であるという非常に深い意味を持った発言から返納した高齢者にとって、どういう意味を持っているのかを明らかにする。聞き取り調査をもとに、返納した高齢者にとって、車との付き合い方の歴史と人生の中の本質的な部分がつながっていることが明らかになった。

2. 背景

現在、急速な高齢化の進展に伴い、高齢ドライバーが急増している。国土交通省の推計でも平成 24 年中の交通事故発生件数は 665,138 件で、これによる死者数は 4,411 人である。自動車乗用中については 65 歳以上の年齢層が全体の 41.7% を占めており、高齢ドライバーが引き起こす交通事故件数が増加し、大きな社会問題になっている。こうした高齢ドライバーが引き起こす交通事故を防止する目的で、平成 10 年から運転免許返納制度が実施されている。その内容は高齢や身体機能の低下などを理由に、自動車などを運転しないので運転免許を返したいという方の申請により、運転免許を返納するというものである。

運転免許返納の既存研究を見てみると、橋本ら(2011)では運転免許返納者の返納後の生活における問題点を述べ、公共交通の充実感が最も大きな影響を与えていることがわかり、運転免許返納後の意思決定時のみでなく、返納後の生活においても公共交通の充実が重要な意味を持っているということを示している。しかし、これまでの既存研究では運転免許がなくても生活のできる環境作りといった表面的な部分しか述べられていない。高齢者がこれまで車とどのように関わってきたのかを明らかにすれば、高齢者が免許を返納することにはもっと本質的な部分が見えてくるのではないかと考えられる。

3. 目的

事前インタビューとして前田礼二さんに聞き取り調査を行

った。写真 3-1 は前田さんが免許返納について高知新聞に投稿し、掲載された新聞記事である。前田さんは 46 歳のときに石垣島でタクシーの運転手を始め、運転が上手な人に送られる優秀の王冠を受賞している。石垣島でのタクシー運転手のことを考えると、免許を返納することに名残惜しいと語っていた。また、私の研究テーマについて関心を持ち、とても感激していただいた。

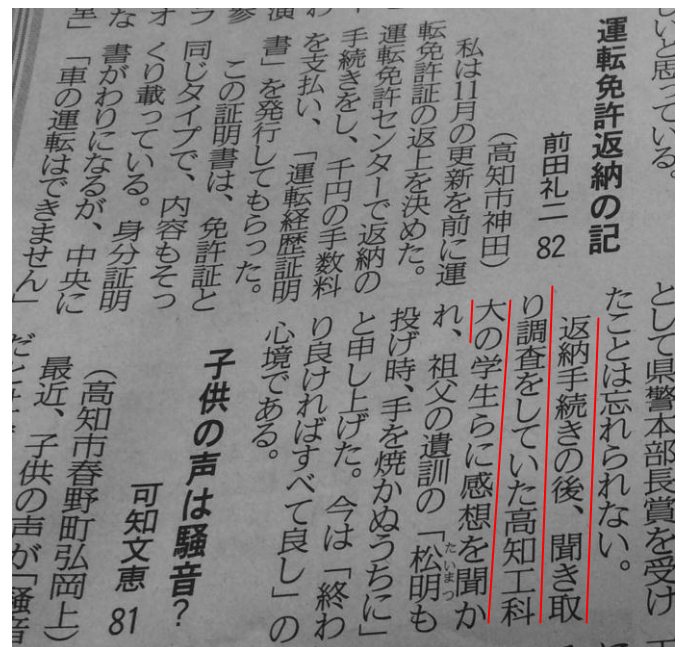


写真 3-1 2014.11.29 高知新聞「声ひろば」

その中で、「いいテーマですね。車は人生ですからね。」という前田さんの言葉で、返納した高齢者にとって、車が人生であるとは、どういう意味であるかを明らかにすることを目的とする。

4. 研究方法

4-1 対象者選択方法

データ収集として、本研究では、高知県警察交通企画課の協力のもと、高知県吾川郡いの町枝川にある運転免許センターにチラシを配布させてもらい、任意で電話をしてもらい、高齢の免許返納者に聞き取り調査を実施した。4名に聞き取り調査を行い、その中で最も返納の未練が少ない A 氏を分析対象とした。A 氏を対象者とする理由は、未練が少ない人で

あっても、「車は人生である」ことが示されれば、より普遍的な知見が得られるためである。図 4-1 は A 氏の年表である。

年代	できごと
1936(0歳)	大阪で生まれる
1939(3歳)	父の仕事のため高知にくる
1941(5歳)	本を読み始める、本が好きになる
1945(9歳)	終戦
1949(13歳)	児童施設か養護施設に本を全部寄付する
1954(18歳)	見合いでの学生結婚、保母の資格を取る
1958(22歳)	保育所で保母として働きつつ、児童クラブ設立運動に参加
1959(23歳)	貧困層向けの母子寮で働く
1994(58歳)	母親と死別、退職
1994(58歳)	免許を取りに通い始める(夫の焼き物の手伝いのため)
1995(59歳)	家庭文庫を設立する
2011(74歳)	夫と死別
2014.8.13(78歳)	免許を返納する

図 4-1 A 氏の年表

対象者である 4 名に聞き取り調査を行った。表 4-1 は、聞き取り調査を行った日付と聞き取り調査時間をまとめたものである。

A 氏：2014 年 8 月 28 日	120 分程度
2014 年 11 月 16 日	120 分程度
B 氏：2014 年 7 月 30 日	120 分程度
2014 年 11 月 12 日	120 分程度
2014 年 12 月 24 日	120 分程度
C 氏：2014 年 10 月 1 日	120 分程度
D 氏：2014 年 10 月 15 日	120 分程度

表 4-2 聞き取り調査を行った日付と聞き取り調査時間

4-2 聞き取り調査方法

質問内容として、免許返納に至った過程や対象者のこれまでの人生での車との関わり方、車以外のその人の記録や生活、過去から現在に至る記憶なども収集する。記録方法として、本人に許可を得て、IC レコーダーを使い録音し、書き起こしを行い、文字にする。

4-3 分析方法

4-3-1 分析ワークシートを用いた概念の生成

分析ワークシートという手法を用いて分析を行う。聞き取り調査から得られる複数のエピソード間の類似性を抽象化し、概念として記述する。

4-3-2 概念間のつながりに関する分析方法

複数ある概念の関連性を作り、概念と概念にどういったつながりがあるのかを見つけ出し、つながった上でその人を理解したと言える。

分析ワークシートの作り方

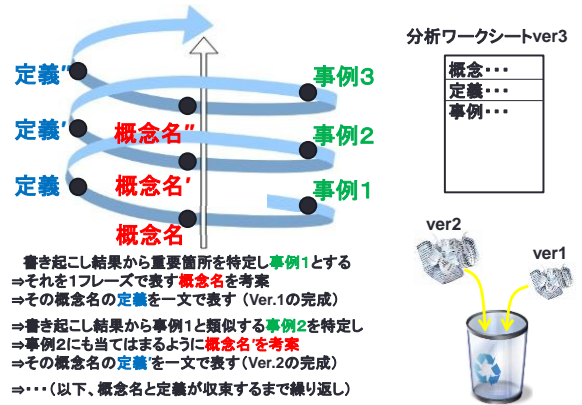


図 4-1 分析ワークシートの作り方

5. 分析結果

5-1 分析ワークシートを用いた概念の生成結果

5-1-1 車に関する概念の生成結果

エピソード1:「いつまでも乗ってて、もし事故を起こしたら。それと生活自体ももうちょっと落ち着いて暮らしたいという思いになって。まず起動力をへすこと。」

このエピソードから、未練を感じる前に自分から返納をしてしまったとして定義をつけ、概念名【車への未練の予防的な断ち切り】を考案した。

エピソード2:「あのね、やっぱりね、この狭い日本で車を乗り回してより便利にそれを快適に暮らすという社会のあり方そのものにね、何か反発を感じてたという。」

このエピソードから、みんなが車を持つ必要がないという考えとして定義をつけ、概念名【車とのストイックな付き合い方】を考案した。

5-1-2 弱者への寄り添いに関する概念の生成結果

エピソード1:「私、子供のときのね、あだながね、おせっかいばあさん。(中略)人のことをほっておけんのんです。ほんで、なんやかんやで、そしてやっぱり人が喜んでくれると嬉しいってところが生まれついてたみたい。(中略)教員を一応志望して教職とってましたのでね、教職も普通の子供たちというよりは、盲学校か聾学校の先生になりたいって希望を出したんです。」

このエピソードから、おせっかいをして人に喜んでもらうことが嬉しく、それが生きる糧になっている。また、貧しい人に寄り添って生きていきたいとして定義をつけ、概念名【オムツをしたお守りさん】を考案した。

エピソード2:「老人ホームとあのそれからあれば幼稚園と

母子寮と三つのね、複合施設のあの経営を自分でやってみた
いなという夢があったんです。」

このエピソードから、貧しい人への施設を設立したいと定
義をつけ、概念名【私設福祉施設の設立の夢】と考案した。

5-1-3 自立した女性に関する概念の生成結果

エピソード1：「私はね、やっぱり自分のこれまでを振り返
ってみてね、やっぱり私のスタートはね、あの終戦の日だ
と思うんです。生き方が。もう価値観がころっと変わってしま
ってそれまで教えられたことが全部それは自分の中での日と
いうことじゃなくて、社会的な出来事と絡めて考えたときに
世の中がそういうふうに変ったということにもものすごい不
信感を持ちましたからね。」

このエピソードから、世の中を信じられなくなったとして
定義をつけ、概念名【容易に価値観を反転させる社会への反
発】と考案した。

エピソード2：「大人のいうことでも誰のいうことでも人の
いうことをそのまま信用するもんじゃないっていう、私の生
きていくひとつのよりどころになったというか。(中略) やっ
ぱり大人が言うことだっても自分が納得せんことは信じられ
んっていう気持ちが強くうえつけられた。」

このエピソードから、人に言われたことを自分自身で吟味
することなく信じ込むことを拒絶するという生き方と定義を
つけ、概念名【吟味なき信用の拒絶】と考案した。

5-2 概念間のつながりに関する分析結果

図 5-1 は A 氏のこれまでの人生を 1 つのネットワークとみ
なした図である。ここでは、各カテゴリーを結ぶ概念②と概
念③、概念②と概念⑤・⑥、概念③と概念⑤・⑥について説
明する。

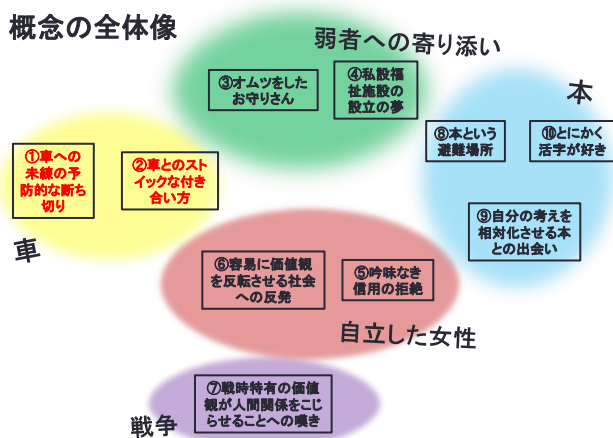


図 5-1 各カテゴリーの概念の全体像

5-2-1 概念②と概念③のつながり方の探求

概念②のエピソード：「あのね、やっぱりね、この狭い日本
で車を乗り回してより便利にそれを快適に暮らすという社会
のあり方そのものにね、何か反発を感じてたという。(中略)
一貫して自分は貧しい人とか弱い人の方に身をおいて生きて
いきたいっていうことが、だんだん小さい子供の頃から自分
の中にあっただので、まあ、できたらストイックな生き方をし
たいという思いがあったので。」

概念③のエピソード：「教員を一応志望して教職とってまし
たのでね、教職も普通の子供たちというよりは、盲学校か聾
学校の先生になりたいって希望を出したんです。(中略) 保母
試験を受けて保母の資格をとって、保母として働く。」

両エピソードは「弱者救済」により、つながっていると考
えられる。なぜならば、概念②「貧しい人とか弱い人の方
に身をおいて生きていきたい」と概念③「盲学校か聾学校の先
生になりたい」という発言から弱者に対する思いやりが読み
取れるからである。

5-2-2 概念②と概念⑤・⑥のつながり方の探求

概念②のエピソード：「あのね、やっぱりね、この狭い日本
で車を乗り回してより便利にそれを快適に暮らすという社会
のあり方そのものにね、何か反発を感じてたという。(中略)
一貫して自分は貧しい人とか弱い人の方に身をおいて生きて
いきたいっていうことが、だんだん小さい子供の頃から自分
の中にあっただので、まあ、できたらストイックな生き方をし
たいという思いがあったので。」

概念⑤のエピソード：「大人が言うことだっても自分が納得
せんことは信じられんっていう気持ちが強くうえつけられ
た。」

概念⑥のエピソード：「私はね、やっぱり自分のこれまでを
振り返ってみてね、やっぱり私のスタートはね、あの終戦の
日だと思うんです。生き方が。もう価値観がころっと変わっ
てしまって、それまで教えられたことが全部それは自分の中
での日ということじゃなくて社会的な出来事と絡めて考えた
ときに世の中がそういうふうに変ったということにもものす
ごい不信感を持ちましたからね。」

両エピソードは「社会への反発」により、つながっていると考
えられる。なぜならば、概念②「反発を感じていた」と
概念⑤「自分が納得せんことは信じられん」概念⑥「不信感
を持ちました」という発言から戦争へのいかりが読み取れる

からである。

5-2-3 概念③と概念⑤・⑥のつながり方の探求

概念③と概念⑤・⑥は1人の人が全く違う概念を持ち合わせている。ここでは、まず、母親について語っているエピソードを3つ挙げる。

エピソード1:「自分のことは自分でちゃんとやって切り開いていかなきゃいけない。(中略) そういう母に育てられた。(中略) しっかり自分で生きていける人間じゃないといかんっていうのがあったと思うんです。」

このエピソードから、母親は自立心を持った女性だということが読み取れる。

エピソード2:「母がそういう点で非常に不遇な人に対する思いやりというか、自分のそういう生い立ちからきてと思うけど。」

このエピソードから、母親は不遇な人に共感することができ、温かさを持った女性だということが読み取れる。

エピソード3:「母がね、(中略)、実母が亡くなったのが小学校の高学年のときぐらいだったでしょうか。そのお母さんというのがね、継母がね、すごい高い教育を受けた人で、まあ、どういう事情だったか、一人女の子を連れて再婚して、あの、私の祖父と結婚して。ところが、いじめということでもないでしょうけどね、すごく母に厳しかったみたいで。厳しいというか、ほんでもう朝、六年生ぐらいのときに学校へ行くのに、あの、食事の仕度を全部自分が炊事をしてたらしいんです。そしたらね、学校へ遅れる生活になったらしくて。」

このエピソードから、母親自身が不遇な生い立ちであることが読み取れる。

以上のエピソードをまとめて概念化する。エピソード1:「自分のことは自分でちゃんとやって切り開いていかなきゃいけない。しっかり自分で生きていける人間じゃないといかん」、エピソード2:「不遇な人に対する思いやり」、エピソード3:「すごく母に厳しかった。食事の仕度を全部自分が炊事をしてた」という発言から、【不遇だったからこそ強さと温かさを持った母】という概念を考案した。これは概念③と概念⑤・⑥とつなぐ接着概念である。母親自身が不遇だったことによって、自立しなくてははいけないという強さと不遇な人への温かさの両方を母親が持ち合わせていることが読み取れる。母親の特徴がA氏にも受け継がれ、概念③と概念⑤・⑥は一見バラバラの概念が、接着概念を生成することによって、両エ

ピソードはつながると考えられる。

6. 結論

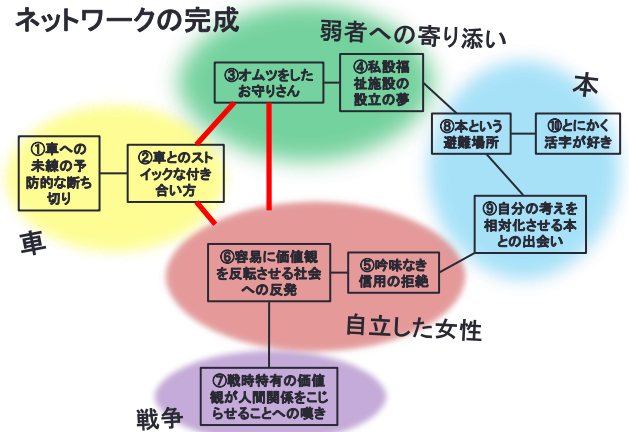


図6-1 ネットワークの完成図

車に何の未練を持っていないA氏でさえ、車との付き合い方の歴史に関する概念②【車とのストイックな付き合い方】と人生の中の本質的な概念③【オムツをしたお守りさん】・概念⑤【吟味なき信用の拒絶】・概念⑥【容易に価値観を反転させる社会への反発】とが結ばれていることがわかった。

返納した高齢者にとって、「車は人生」であるとは、車が、人生の中で培ってきた自分の信念を体現し、その正しさを確かめたり、その信念が生まれてきた過程を振り返るきっかけを与え、これからの人生をその確固たるものとした信念に従って生きていくための道標を与えるということが本研究で明らかにすることができた。

7. 今後の課題

本研究では未練のない人を対象に分析を行ったが、未練のある人にも同様の分析を行い、本研究で発見したことの普遍性を確認する必要がある。

参考文献

- [1] 橋本成仁・山本和生
都市計画論文集 Vol.46 (2011) No.3 P769-774
『居住地特性から見る運転免許返納者の特性把握』
- [2] 山本和生・橋本成仁
都市計画論文集 Vol.47 (2012) No.3 P763-768
『免許返納を行うための要因と意識構造に関する研究』
—免許保有者と返納者を比較して—